

審 議 会 等 の 会 議 結 果 報 告 書

課所名	高齢者福祉課
-----	--------

会 議 名	令和5年度諏訪市認知症初期集中支援チーム検討委員会
-------	---------------------------

開催日時	令和5年7月13日(木) 19時00分 から 20時 30分まで
------	----------------------------------

出席者	<p>検討委員： 守屋 和則健康福祉部長(委員長)、山崎 義夫副委員長、小島 洋二委員、丸山 史委員、植松 洋子委員、福田 和博委員、降旗 香代子委員 櫻井委員代理:大羽氏、宮坂 翔委員、藤原 希美委員、今村 貴保委員 坂田 雄二委員、松本 宙明委員、</p> <p>事務局： 高齢者福祉課長 宮坂 吉郎、高齢者福祉係長 小口 隆、同係主査 草間 裕美 ライフドアすわ 小澤認知症地域支援推進員</p>
-----	--

資 料	<ul style="list-style-type: none"> ・諏訪市認知症初期集中支援チーム検討委員会 次第 ・諏訪市認知症初期集中支援チーム検討委員会 名簿 ・諏訪市認知症初期集中支援推進事業実施要綱・図 ・諏訪市の高齢者の状況 ・諏訪市認知症初期集中支援チーム員名簿 ・諏訪市認知症初期集中支援チーム 初期集中支援業務の基本的な流れ ・チーム員会議にて共有した包括支援センターに寄せられた相談 ・認知症初期集中支援チーム員会議実績、支援実績 ・検討事例の経過 ・ライフドアすわ認知症に関するリーフレット
-----	--

協議議題(内容)及び会議結果(要旨)

1 開会【司会 宮坂課長】

2 委嘱状交付

- ・机上交付

3 挨拶【守屋 健康福祉部長】

4 自己紹介

5 協議事項【進行:委員長 守屋健康福祉部長】

(1)検討委員会について【小口係長】

- ・資料に基づき委員会の位置付けについて説明

(2)諏訪市の高齢者の現状【小口係長】

- ・資料について説明
- ・市全体の高齢化率は、31.0%。上諏訪地区は高齢化が進んでいる。
- ・2025(R7)年には後期高齢者が6割を超える見込みとなっており、認知症高齢者の推移についても増加が見込まれる。
- ・介護認定は要支援者の増加。コロナ禍の影響も出てきている可能性もあり、より一層早いうちからのフレイル・介護予防、適切な支援や重症化予防が必要。

(3)チームの活動状況等報告【草間】

- ・資料に基づき説明
- ・チーム支援の基本は、認知症の相談を受け専門職による訪問を行い、チーム員会議で支援方針を検討、おおむね6か月を目途に支援の実施を行うが、個々のケースによって支援は様々。
- ・チーム支援の実績について。令和4年度のチーム支援は3件。2件は終了、1件は継続。認知症の相談について142件中68件、チーム支援対象者と合わせ、チーム員会議での検討件数は73件。
- ・かかりつけ医など地域の先生方から認知症診断パスで日赤との連携ができています。日赤と包括も必要に応じて情報共有が図れるようになっている。
- ・チームの活動が7年目となり、毎月の会議の経験が積み重なり、対応力が向上
- ・「訪問」以外の電話や来庁での情報提供や地域包括支援センターの対応で支援につながることもある。
- ・ケースの経過報告

(1)から(3)について質問

→ なし

(4)各機関の取組状況 《発言趣旨》

①認知症カフェの取組について

認知症カフェは、認知症の人やその家族、医療や福祉の専門職、地域の人など誰でも気軽に集うことができるカフェ。認知症について学んだり、専門職に相談したり、介護に関する情報交換や交流が持て、リフレッシュできる場でもある。ライブドアすわでは、去年の6月から毎月第3火曜日の午後開催。

一般参加者のほか、認知症サポーターのボランティア、専門職も参加している。

今後は地域で開催できればと考えているが、運営するスタッフや開催場所などの課題がある。

現在のカフェでは、認知症サポーターのボランティアの方に、会場準備、受付、座談会では傾聴など協力を得

ている。こうしたボランティアの力を地域で活かしていけないか、開催場所については、社協の持つネットワーク力を借りつつ、色々な形のカフェを考えたい。

<委員長>

ライブドアすわから認知症カフェについて、昨年6月から開催していること、カフェを運営していく上で開催場所やスタッフに課題を抱えていると報告があった。社協のネットワークという話もあったが、広い意味で意見交換ができればと思う。

<委員>

県内他地域での認知症カフェについて紹介。体操やおカリナ、人形劇、食改からの提案でお弁当持参のピクニックなどを行っている。ボランティアから「こんなこともできるよ」と提案を受けて行うこともある。また、人形劇では、保育園との世代交流を図っている。また、4年前からオレンジカフェがコロナで中止となっていたが「集まる場所が欲しい」と再開した地域もある。認サポのアンケートでボランティアをしても良いという人に送迎や手伝いなどしてもらっている。様々なカフェがあり色々な内容で取り組んでいる地域では、一部委託で内容等もお任せでやっている。

<委員>

キャラバンメイトではサポーター養成講座をしている。ここ数年は、意欲のある人がサポーターとしてボランティアに参加してもらいたいとフォローアップ研修をしている。キャラバンメイト事務局から住所等を確認させてもらい、必要なところで次につながる支援を始めている。「チームオレンジ」に関しては、個人的なところでの支援。例えば、お隣の認知症の方に対して研修を受けた人が支援に入る。通学時間帯と一緒に散歩に出てもらい見守り活動に寄り添う、諏訪市辺りは「お湯友」、お風呂に一緒に行ってもらう活動のところも考えている。

カフェのボランティアもサポーターのフォローアップ研修終了者にお手伝いいただくのが目標になってくる。

<委員>

認知症疾患医療センターでは、昼間の活動性が少なく夜眠れないため、問題行動に結びついてしまう方の日中の活動性を上げたいと考えた時に、デイサービスなどを勧める場合がある。ただ、疾患医療センターに来る方は、半分以上が軽度認知症や認知症の診断がはっきりつかない人。自分のプライドがあったり年齢が若かったりするとデイサービスへの抵抗がある。そういう場合にカフェを勧めることで出かけるきっかけになったりする。カフェの良いところは、介護の経験者から話が聴けたり、参加している人たちが立場関係なくおしゃべりしたりゲームしたりできる。出かけるきっかけづくりになると良い。

<委員長>

支えたり支えられたりの関係がこういうところできると良い。役割を持って参加できると良い交流ができる。

<委員>

複合施設の一角で、2021年まで認知症対応型のデイサービスを定員10名でやっていた。その一環で認知症カフェを開催。月ごとにテーマ(オムツの使い方・腰痛予防・介護者のリラックス・アロマなど)を決めて、お茶代200円、10~15名程度参加していた。2020年のコロナで開催が中止になり、デイも通常のものと同統合したことで終了した。家族や民生委員、他事業所の方なども参加していた。

スタッフは、メインに進めるのは施設職員。外部講師として、福祉大、福祉用具の事業所、老健のリハ職などが関わっていた。

<委員>

小規模多機能は、認知症の方を主に支えている。一人ではなかなか生活が成り立たない重度から中等度の方たち。本人・家族と話をする中で「一人でいてもつまらない・寂しい」認知症の親を抱えていて大変・不安に思っていることが聞こえてくる。軽度の認知症の人、「認知症」と見た目では全くわからない、生活も自立している人が地域にはたくさんいる。なおかつ、本人も困っている中で認知症であるけど自身で認められない・病識がないという方もいる。そういう方たちが、こういった場所を使えることで介護施設の利用などにつながっていけるように認知症カフェを使っていけると良いと思う。

今後の場所としては、「わざわざそこまで行かないといけない」のではなく、「そこにある」環境になるともっと使いやすくなるのではないかと思う。

<委員>

社協で認知症サポーター養成講座を開催している。今までは、地域で何か特別なことをするのではなく「見守りをしてください」とアナウンスしていた。今は、受講者へのアンケートの中でイベントや講座などの協力をお願いして100人を超える人の参加協力の意志を把握している。実際の活動としていく上で、活動の受皿の準備が必要で、その検討も必要。認知症カフェの中で、実際に3名のボランティアが活動中。今後より多くの場所で活動できることが理想。事例にあったように、個別のケースから認知症カフェにつながることもあるので、地域の中からの支え合いでつながっていくことも良い。他地域では、人形劇など演芸のボランティアやコーヒーを淹れるボランティアもいる。そういった地域のボランティアが関わることで、ボランティア自身が今後認知症になった時に「認知症カフェが近くにある」という認識のPRにもなる。社協としてもボランティアとのコーディネートを意識してやっていきたい。

<事務局>

同じ場所ではなく別の場所で開催してみるとか、できることから取り組みたい。ボランティアの力は大きい。認知症の方、家族、関心のある人など色々な立場の人が参加していることもあり、カフェで取り入れるレクや内容などが難しいことが多い。ボランティアからの提案を取り入れているという話を聞き、こちらからもボランティアへのアプローチが必要。

②見守りネットワーク事業について

令和3年度、『見守りネットワーク事業』『認知症高齢者等見守りシール交付事業』を開始。

『見守りネットワーク事業』は、市と民間事業所や警察署などの関係機関が連携し、高齢者の異変や行方不明が発生した場合に早期に気付き、必要な支援につなげる仕組み。利用の登録者数は、令和3年度は13名、令和4年度は7名。今年度の申し込み数は5名。転出などの理由により、現在の登録数は、21名。

協力事業所数は、令和3年度は15事業所、令和4年度は5事業所となっている。

『認知症高齢者等見守りシール交付事業』は、行方不明になる心配がある高齢者やその家族を支援するため、QRコードのついたシールを交付する事業。利用登録者数は令和3年度10名、令和4年度は7名。今年度申し込み数は4名。現在は17名の登録。実際に行方不明からの読み取りは0。

ネットワーク事業で協定を結んでいるのは、警察署や新聞販売店の他、薬品会社、八十二銀行、生活協同組合(パルシステムやコープ)、生命保険会社、スーパー(オギノ・デリシア・いちやまマート)、ウェルシア薬局など。

協定を結んだことで、認知症の方の保護、新聞が溜まっている方の安否確認、ATM操作や度重なる通帳の再発行などから認知症が疑われ対応に困る等の連絡があり、より密に連携を図ることができた。

今年度から『認知症高齢者等個人賠償責任保険事業』を開始。認知症等の高齢者が日常生活の中で、偶発的な事故により第三者に対して法律上損害賠償責任を負った場合に、諏訪市が契約する認知症高齢者等損害賠償責任保険を利用して補償を受けることができる。諏訪市見守りネットワーク事業に登録された認知症等の高齢者及び40歳以上の若年性認知症の方が対象となる。こちらの登録者数は、現在11名。

<委員>

職務内で対応するのは、行方不明・徘徊老人、運転免許業務や交通事故、万引き事件、家庭内暴力などある。警察官は、専門知識はないので、対応する中で「おかしいな」「認知症の疑いがあるのかな」と感じる事があれば、病院や市など関係機関へつなげている。取扱いは非常に多いが、見守りの登録の方が増えてくると保護者につながりやすいと思われる。

<委員>

見守りネットワークになる以前は、新聞については社協に連絡をもらい対応していることもあった。登録の利用者が増えると警察のほうでも対応がしやすいとのこと、日々の相談の中で「認知症かな」というケースに伝えていけると良い。

<委員長>

制度・仕組みへの質問は？ →なし

こちらで予定した取組状況の報告は2点になる。総括する中で、それぞれの立場でご意見や最新の情報や共有することがあれば。

<委員>

チーム員代表という立場で参加。制度ができて何年か経つ。どこのチームや地域包括でも、チーム専門医が現場に行くことはほぼないのではないか。これは、チーム専門職や地域包括が現場に出向いて訪問活動しているため。チームの制度ができてから自分も含めて現場に行ったことはない。これは、専門職の中で制度につなげるという目標があるのでかかりつけ医がいない人は受診につなげ、介護保険や認知症を支える制度につなげられている。

認知症カフェ、認知症当事者は必ずしも参加しなくてもいい。認知症当事者が入院やデイに行っている時に、家族がレスパイトの目的や情報共有、ストレス発散するための場所でもある。地域の中で「そこにあるからいけるカフェ」が大事なことで、いろんな事業所の方が認知症カフェの開催場所として手上げをしてくれるようになるとありがたい。

ボランティアの支えについて。前期高齢者の活躍の場が課題にあげられることがある。退職後のまだまだ働ける人の活躍できる場が、こういったボランティアの位置付けとして広まっていくと良いと思う。社協などから、参加してもらった人に声掛けをしていくと、支える側の人口もまだまだ確保できるのではないか。

<委員>

精神科は認知症の困った人が最終的に入院する。日赤は25床しかベッドはないが、認知症の BPSD で入院している人が10名。ほとんどが諏訪市以外からの緊急入院。診断が遅すぎるケースも多い。幸い、諏訪市にはそういう人はほとんどいない。そういった意味では、認知症初期集中支援チームはうまく機能していると思われる。専門医やかかりつけ医が患者をしっかりと診てくれるので、早めに相談してもらえる。地域でみてくれる人がいるので、早めにどこかにつながっているのが良いと思う。ここ最近、高齢者のみ世帯で子どもは遠

方、コロナ禍で子どもが来なかった3年間、認知症が進んでいくが二人で認知症なので認知症かどうかわからない、言っても分からないからイライラして、どっちかがどっちかを殴ってしまうなど何か問題が起きて病院へやってくるということが増えている印象。そういったケースも諏訪市は少なく、他市町村が多い。ゼロではないが、人口から考えたら諏訪市はうまくいっていると思うので、チームの活動に感謝したい。

<委員>

薬剤管理という立場から、患者と話をしている「あれ？」ということがあり家に行くと薬が飲めていないことがある。医師へ「認知症の疑いがある」と報告をして、実際に診断されたケースもある。薬局は待ちの姿勢が多いが、外に出て患者の家に行けることは強みでもあるので、継続していきたい。

認知症カフェについては、薬剤師会の会合でも話題に出たことがない。相談を受けると介護認定につなげることが多いが、その一歩手前として認知症カフェの取組は非常に良い。薬剤師会に持ち帰って広めていきたい。

<委員>

みなさんが認知症に関して色々な角度から色々な意見を持ち推進していることが分かった。各委員が熱意を持って取り組んでいる。常日頃から専門職、医師といっても専門分野があるが、それだけでなく気付きの心がけが大切。気付いて介護に乗せていく気持ちを持っていないといけな。それが、諏訪市の措置入院ゼロにつながるのでは。先生の言葉は心強く、さらに続けていこうと思う。

6 その他【宮坂課長】

ありがとうございました。全体を通して何かございますか。 →なし

7 閉会【副委員長】

大勢の皆さんにご意見いただきありがとうございました。認知症は身近なところに起きること。共に暮らすことが当たり前の世の中になっている。民生委員で関わる中で周りの人が心配して相談に来るが、話を聞くと家族が「周りに知られたくない」という思いで話をすることができない人もいる。ストレートに言わなくても「認知症カフェ」が本人のためになっていく有効的な機会となっていくと良い。

担当の地区へ、こういった制度や認知症の支援に携わる人がいることを戻し、有効活用していきたい。